

## 神戸大学ラグビー部との繋がり

野 田 五 郎 (昭32 G7卒)

### 両校ラグビー部のOB会誌交換

神大ラグビー部のOB会報「凌霜ラガー通信」は年に2度発刊され、その都度淡水ラグビーに送付頂いています。最近ではこの7月に受信しました。神大も昨年はコロナでまともに部活できなかった様子です。

OB会の会報発刊は定期的にOBに現役の様子を伝え現役援助を促すことと思います。つまり凌霜ラガー通信の淡水ラグビーへの送付は本来の目的外で友好儀礼に過ぎません。只、近年は当方のOB会報は発刊回数が減っていて、凌霜ラガーカーへの送付は途絶えているのでないでしょうか。以前淡水ラグビー会誌は凌霜ラ以外に淡水会長(事務局)、甲南大OB会、姫路工大OB会、淡水サッカーカー、淡水野球クラブにも年に2度届けていました。

神大と母校の現役とは所属する学生リーグで差がついてから約50年になります。そのため若い人達が神大ラグビーに親近感を持つ人が少なくなり、凌霜ラガーカーとOB会誌の交換をする意味をピンと来なくなても仕方ないかも知れません。しかし母校と神大、そして両ラグビー部間には校史、部史の上で特別に深い関係があります。近い将来再び実力伯仲関係に戻らないとは限らず、現役はそれを目指して励み、OBはそれをバックアップしなければなりません。神大と母校間でこれ迄に築かれた関係は学校や部の歴史でありそれは次代に正確に伝えて行く使命がありますが、伝えるのは現役よりむしろOB会の役目です。凌霜ラガーカーは今もOB会誌を発刊の都度送付して貰っており、又先方の創部65年と90年の記念祝賀会には淡水ラグビーカーを招待して頂きました。それは凌霜ラガーカーがそうした淡水との古い関係を大切に思っているからです。

ラグビーという競技には長い歴史があり、その長い歴史が育んで来たことを大切にするスポーツです。その点は後から生まれたスポーツとは違います。若い時に例え僅かでもラグビーに親しんだことがあればその時に培われたメンタルを誇りに以後の人生を過ごす、それがラグビーが目指すところです。今はプロスポーツ全盛時代です。日本にプロのラグビーリーグはありませんが、トップレベルのラグビーリーグにはプロ選手もあり、そうでない人もプロ意識でプレーしています。又、それ以下のチームもこうしたトップチームから最新の技術を直接間接に教わっています。只、プロはファンあって成り立つスポーツで、先ずは勝つことを最優先されます。しかし学生スポーツ、特に学生ラグビーは勝つことだけを目標にしてはなりません。ましてや金銭や自らを高く売り込む手段にしてはなりません。現代社会では世界中の学校がスポーツを教科や課外活動に

取り入れています。学生スポーツの最大の狙いはスポーツによって人としての素養を身に着けることで、スクールラグビー最大の狙いはラグビー精神を身につけそれを以後の生涯に活かすことです。学生時代にラグビーを体験した人は、それをその期間だけのものにしてはやっていた値打ちがありません。

ここではそうしたラグビーの素晴らしい歴史を語るのは紙数の都合上省ますが、ラグビーに限らずイギリス発祥の他の幾つかのスポーツは以後にできたスポーツの精神上の原点になっています。ラグビー精神は18世紀にラグビー校の子供達により形作られ、その精神は19世紀後半にヨーロッパ社会の生活規範にされ、20世紀になるとそれは全世界に広がりました。近代オリンピックはクーベルタンが若い頃ラグビー校の子供達の生き方とその崇高さに感銘して、それを基本に編み出した世界最大の競技大会です。ラグビー精神の象徴はフェアプレー精神です。これはキリスト教と中世ヨーロッパの騎士道精神から影響を受けています。只、ラグビー精神にはそれ以外に試合終了迄全力をかけて戦う敢闘精神や、共にプレーした仲間とは生涯不斷の友情を築くことも大切なことになっています。

このような人生の規範になる教えを説くスポーツはラグビーだけに限りません。柔道は今や世界百数10ヶ国に普及する国際スポーツです。日本発祥の柔道がなぜ世界中でこんなに受け入れられるのか、それは柔道も勝ち負けだけが目的ではなく、柔道精神を大切にするスポーツだからです。明治の著名教育家 嘉納治五郎が我が国伝統の柔術に人の生きる上の道理を加えて柔道に完成させました。柔道は日本古来の武士道の影響を受けています。礼に始まり礼に終わる柔道精神のない柔道はありません。講道館館は「精力善用 自他共栄」とは「自ら持てる力を全て試合に尽くすのと共に相手を尊敬して共に栄えよ」と諭しており、これはラグビーやオリンピック精神にも相い通じます。

### 神大と神大ラグビー部の生い立ち

母校前身の県立神戸高商は神大の母胎である官立神戸高商の大学昇格が起因で創立しました。そして母校が大学に昇格し、又その後に大学院が設置される迄、神大は母校卒業生の主たる進学者でした。母校のラグビー部は母校誕生と同時に創部して、その後約半世紀間に亘り神大ラグビー部と密接な関係にありました。即ち神大とは毎年公式戦や練習試合を行い互いに切磋琢磨し合う間柄であったとともに、母校ラグビー部創部以降の高商時代は多数の部員が官立神戸高商に進学してラグビーを続けました。そのため両ラグビー部には共通のOBが大勢いるという兄弟のよ

うな関係になりました。

現在の神戸大学は昭和 25 年の学制改革により単科大学だった旧制神戸経済大を母胎に、旧制姫路高、旧制神戸高工、旧制御影師範、旧制明石師範等が統合して新制総合大学 神戸大学として発足しました。その後更に県立神戸医大 県立兵庫農大 国立神戸商船大を併合して医学部 農学部 海事科学部等が加わりました。今の神大前身の神戸経済大学は明治 36 年に創立した官立神戸高等商業が昭和 4 年に神戸商業大学に昇格、昭和 16 年に予科を併設、昭和 18 年に神戸経済大学と名称を変更した大学です。

今の神大ラグビー部は大正 12 年、陸上運動部（注 当時陸上競技部と言わなかった）の部員数人が集まり陸上運動部の分身として創部されました。即ち神大の創部はまだ高商の時代です。同年に関学大ラグビー部も創部しましたが神戸高商の創部は正月だったので、今の神大ラグビー部は中学 高専 社会人を通じて県内初の歴史あるラグビー部です。尤も神戸では明治初期から K R & A C（神戸レガッタ&アスレティック、通称神戸外人ク）が YC & AC（横浜カントリー&アスレティック、通称横浜外人ク） 慶應 三高 同大等のチームを神戸東遊園地に招いてよく試合していましたから、神戸市民は既に明治初期からラグビーの観戦に馴れ親しんでいました。

官立神戸高商ラグビー部の創部には陸上運動部員今里麟太郎氏の京一中（現洛北高）時代の親友望月信次氏の勧誘がありました。望月氏は三高を経て京大に進学してキャプテンを務め、TB として時代を画した名プレーヤーです。又同氏は又京大を全国初制覇させ 3 連覇に導いたミスター ラグビーこと香山 蕉氏（ひざ）を京大の監督に招いた蕉ちゃんの秘蔵っ子の 1 人です。三高や京大のラグビー部員は創始校慶應のラグビー部員がやっていたのと同様、ラグビーの普及のために各地の学校を訪れて創部を促して回り、殆どの場合そこでコーチをやっています。望月氏が官立神高商のラグビーを指導したかどうかは確認していませんが、十中八九やっていたに違いありません。

母校ラグビー部もスタート時に望月氏と同時代、即ち京大最強期の馬場次郎、小西恭賢両氏に直接指導を受けており、両校ラグビー部には原点が京大ラグビーという共通点があります。香山の京大ラグビーは今の 8 人制 FW の日本の創始校です。創始校慶應は当時のラグビーが 7 人制 FW だったのでその後できた大正期の我が国ラグビーは全て慶應式の 7 人制 FW でしたが、京大が昭和 3-5 年に 3 連覇すると、同大 早大 明治 立教は 8 人制の方が優れていると考え切り替えました。当時慶應も 8 人制に切り替えるべきか否かの葛藤があったようですが、戦後迄 7 人制 FW を貫きました。

## 明治・大正期の日本のラグビー界

日本のラグビーは明治 32 年 1899 年に慶應で始まり、その 11 年後 明治 43 年に京都出身の慶應部員の勧誘により三高、続いて同大にもラグビー部が生まれました。創部当初慶應の部員は各大学 高専 中学に熱心に創部を働きかけ、明治 40 年秋に群馬県立太田中学にラグビー部が誕生し三田で慶應普通部と試合をやりましたが、2 年で活動停止しました。当時はラグビーのような外来スポーツを郡部の町で続けるにはコーチや用具を確保する上で難しかったようです。つまり関東では大正 7 年の早大が創部する迄慶應以外に日本のチームはありませんでした。

ところが京都では三高 同大の創部に続き、三高部員の勧誘により京一中、京一商（現西京高）に、そして同大も普通部（現同志社高）で相い次いで創部があった上、三高や同大 OB が夫々の同好会チームを作り頻繁に試合をしていました。特異な例として京都ではこうした三高 同大のラグビーの流れとは別に英国留学経験のある西本願寺管主 大谷光明師の作った錦華殿というクラブがあり、注目すべきことにそこには太糸（うずまき）全面芝生の専用グラウンドがありました。大正 1 衔年代の日本ラグビーは京都が中心と言っても過言ではありません。当時慶應の試合相手は関東ではなく、三高と同大に限られていました。

しかし大正 7 年の早大の創部を機に全国の大学 高専 中学 企業にラグビーチームの設立が続きました。神大ラグビー部はその端緒になった伝統チームで、間もなく創部百年を迎えます。そしてその 6 年後 昭和 4 年（1929 年）に母校ラグビー部は誕生しました。この年の秋には初めてのラグビー専用花園ラグビー場が竣工、翌 5 年には香山氏率いる日本代表チームが誕生してカナダに初遠征、6 勝 1 分無敗という信じ難い好成績を収めて国際ラグビー界にデビューしました。大正 10 年前後から第 2 次大戦激化前迄の約 20 年間日本中の大学 高専 中学 社会人ではラグビーブームに沸き立っていました。

## 明治のラグビー黎明期から大正のブーム期に創部した我が国伝統チーム

明治 32 慶應大 慶應普通部（慶應高校 創部年不詳）

39 群馬県太田中学（2 年後活動停止、昭和 40 年代太田高で復活、先年群馬代表で花園出場）

43 三高（注、慶應-三高の定期戦は昭和 25 年迄続いた日本最古の定期戦）

44 志同社大（注、慶應 vs 志同社定期戦は現存する日本最古の定期戦）

45 京一中（現洛北高） 志同社普通部（現志同社高） 錦華殿ク

大正 3 京一商（西京高） 神陵ク（三高 OB の同好ク） 京都ク（同大 OB の同好ク）

5 天狗ク(京大の前身ク) 弥生ク(同志社普通部と京一商 OB の同好ク)

7 早稻田大 大阪高商(現大市大)

10 東大 京大

11 東京高商(現一橋大) 明治大 天王寺中(現天高)

12 神高商(現神大) 関学大(同好会発足はそれ以前、年次不詳) 関西大 立教大 東高師(現筑波) 一高  
大阪高 成蹊高(現成蹊大) 甲南高(現甲南大) 札幌農(現北大) 北野中(現北野高)

13 法政大 中央大 浦和高(現埼大) 姫路高 青山学院 二高(現東北大) 五高(現熊本大) 高知高(現高知大)  
水戸高(現茨城大) 浪高 成城高(現成城大)

14 近衛師団 第一師団 マツダランプ(現東芝) 三重高農(現三重大) 大外専(現阪大) 大分高商(現大分大)  
小樽高商(現小樽商大) 旅順工大予科

15 甲南尋(現甲南高) 日魯魚 鉄道省 神高船 立命館中(現立命館高) 京三中 早実(現早実高) 晓星中(現  
曉星高) 福岡中(現福岡高)

官立神戸商大は昭和 16 年に予科を併設、同時に予科ラグビー部も創部しました。しかし昭和 25 年の学制改革により予科は 9 年の短い歴史の幕を閉じ、ラグビー部も自然廃部になりました。只、母校は戦時下の部活停止期を除く僅か数年間に神経大予科とは何回も対戦しています。

神戸商船大ラグビー部は大正 15 年神戸高等商船時に創部した名門チームで、母校も毎年鎬を削り合った相手です。昭和 25 年の学制改革で神商船大に昇格した後も母校は同校と毎年のように対戦しました。神大に統合されるとラグビー部も神大ラグビー部に統合されて廃部になりましたが、只、神大ラグビー部はその後ホームグラウンドを六甲台から東灘区深江の旧商船大グラウンドに移転し、OB が先年そのグラウンドの人工芝化工事を寄付し(数千万円推定)、更に若い OB が現役に混じり人工芝メンテナンス作業を奉仕しており、元の神商船グラウンドは今でも凌霜ラグビーによりその歴史は継承されています。

神大医学部は県立医大を併合してできた学部ですが、ラグビー部は神大に統合せず医学部ラグビー部として今も存続しています。母校も大学リーグ発足前は県立大学スポーツ大会で、その後は関西学生リーグで毎年のように対戦しました。OB の山中伸弥氏が iPS 細胞でノーベル賞を受賞されたことにより神大医学部ラグビー部の名は全国に広まりました。

旧制姫路高ラグビー部も名門チームで存続中は母校もよく対戦した強豪校でしたが、学制改革で廃校になりラグビー部も消滅しました。只、同校の旧学舎は現在母校兵庫県立大学の人間科学

学部学舎になっています。県立農大にもラグビー部があり母校も県立大学大会で対戦経験がありますが、神大統合前に部員が削わなくなり部活を停止していました。

### 県立神戸高商の設立 神戸商業大への進学ルートの確立

官立神高商の大学昇格が昭和 4 年と決まり、只、予科の併設は保留されたので、神戸に高商課程の学校がなくなることを憂いた県立神戸第一商業(通称県商 元神四中と一緒に現在は星稜高)の卒業生有志と同校の父兄会が県商の高商昇格運動を熱心に進めました。しかし県が新たに高商を設立すると決定して、県立神戸高商 即ち母校は昭和 4 年 4 月の官立神戸高商の大学昇格と同時に創立しました。

その後文部省の非常時専門学校措置令で昭和 19 年 4 月に校名を神戸経済専門学校に変更、更に戦後の学制改革で新制大学第 1 号認可を受けて昭和 24 年 4 月に神戸商科大学に昇格しました。即ち母校の大学昇格は神大や東大といった新制国立大学の発足に 2 年先行しています。昭和 40 年に大学院を創設、更に平成 2 年 4 月に学生数増加によりキャンパスを垂水から西区学園西町に移転、平成 16 年 4 月に県立姫路工大、県立兵庫看護大と統合して現在の総合大学 兵庫県立大学になりました。しかしキャンパスは統合前の夫々神戸 姫路 明石キャンパスのまま、大学本部は統合前の神戸商科大学、現在の商経キャンパス内にあります。

そうした設立事情により母校の昭和 7 年の第 1 回卒業生から 20 回の 26 年の最終卒業生迄、大学に進学する学生のほぼ全てが官立神商大に進学しました。又昭和 40 年に母校に大学院ができる迄も神大は母校の主たる修士課程進学先でした。一方神大は母校設立以降は母校教員の有力供給源になったのと同時に、神大大学院に進学した母校卒業生中から同校で教職に就く人が多数輩出、つまり両校間には教員の相互供給関係もありました。神戸大震災復興に多大な貢献を果たされた神大元学長 新野幸次郎氏もその 1 人、母校 K15 回卒業生です。

ラグビー部でも昭和 9 年の卒業後神戸商業大に進学してラグビーを続けた甲斐素雄、滝谷善衛両氏を皮切りに高商 20 年間に神経大に進学した多数のラグビー部員が神商大ラグビー部でも活躍しました。異色例としては先年神大ラグビー部部長を辞めた経営学部名誉教授 滝川好夫氏は母校 G26 卒業生です。淡水ラグビー恒例の毎 5 月の現役 OB 対抗戦にもよく顔を出され、同期生の OB と旧交を温められました。母校ラグビー部にも気遣って頂き、神大退任後の現在は凌霜ラガークの顧問として引き続き神大ラグビー部を支えられています。

## 神大の大学昇格に纏わる裏話

文部省は関東大震災より前に神戸高商 東京高工(現東京工大) 大阪高工(現阪大工学部) 東京高師(現筑波大) 広島高師(現広島大)の5校を大学昇格させると内定していました。ところが想定外の大震災の勃発で龐大な復興資金が必要となり5校の昇格は見送られ、続いての世界経済大恐慌に我が国も巻き込まれた上、更に国際情勢の緊迫化により軍事予算の急増に迫られ、その煽りを受けて5校の大学昇格は保留されたままになっていました。

元々東京高商、神戸高商、大阪高商の3校は何れ大学に昇格させる含みで4年制で、その他高商(3年制)より上格扱いされていました。この流れにより大正9年に先ず東京高商が一橋大に昇格、神戸高商も続いて昇格するところが震災勃発で保留されました。ところが大阪市が大阪高商の大学昇格を昭和3年と決定したため文部省は神戸高商の昇格を急がなくてはならなくなりました。

文部省が諸般の事情で5校の大学昇格を躊躇していたのに、大阪市は大阪高商の昇格をなぜ先行決定したのでしょうか。明治維新の近代化政策により関東経済は国策企業中心に発展したに対し、大阪は江戸時代からお上の世話をにはならないという自負心が強く浪速経済は当時の日本経済を牽引していましたが、明治期にも大阪は民営企業中心に東洋のマンチェスターと言われる更なる大発展を遂げ、官費に頼らず地元資金で学校を建て、道をつけ、橋を架けていました。他方大正3年の第1次大戦の勃発で神戸では海運業、造船業、製鉄業が飛躍的に発展、震災と経済恐慌に喘いでいた東京を尻目に大阪市は市域人口 経済総生産で東京を上回り日本1になったので、当時の関西人は「東京何するものぞ」と意気軒高でした。大阪と神戸が市立大阪高商の大学昇格 官立神戸高商の大学昇格 県立神戸高商の3つを同時実現できたのは当時の大阪・神戸の両経済界に地力があったからです。特に神戸は今とは雲泥の差があり、文字通り日本を代表する先進国際商工業都市であり、日銀、海運会社、綜合商社等の神戸支店長ポストは次期トップを約束されるお決まりの出世コースでした。

## 母校 県立神戸高商ラグビー部の創部 活動目標は打倒神商大

昭和4年の官立神戸高商の神戸商業大に昇格と同時に母校県立神戸高商が開校、そして第1回入学式が行われた4月25日から2-3日後にラグビー部が早々と創部しました。母校初代校長伊藤真雄氏は大阪高商校長歴を持つ人で、新しい県立神戸高商は日本一の高商にすることを建学目標に掲げ、同時にスポーツを興隆させようと考えました。その時伊藤校長が目指したスポーツ振興政策とは具体的にどういうことだったのでしょうか。それは自らのケンブリッジ大学留学体験

からラグビーかボートを校技に指定することと、全生徒の運動部加入という2つを制度化することです。そんなにスポーツ振興に燃えていた校長のもとに入学式を終えたばかりの新入生3人(岡部誠一 北野精一 尾崎成文の3氏)からラグビー部創設願いが提出されたので校長が小躍りして喜んだのは目に見えます。直ちに彼等の願いを認めた上で全力を挙げ部活を支援すると約しました。ラグビーの校技指定は実現しませんでしたが、生徒全員の運動部加入は初年度中に実現しました。

昇格後の官立神戸商大は新キャンパスが竣工する迄元の神戸高商キャンパスに留まっています。それは灘区上筒井、元神戸松蔭女子校の場所ですが、創立時の母校と同じ上筒井の今は海星女子校の場所にあった県商に同じく2年間借りていたので、両校は目と鼻の先同士でした。となれば創部したての母校ラグビー部が6年兄貴分の神商大ラグビー部に目が向いたのは極めて自然です。早々に初年度活動目標を「打倒神商大」と決めてその実現を目指し連日ハードトレーニングに励みました。この辺りのことはラグビー部50年史に数々の逸話として残されています。そして驚くべきことに半年後の10月11日に神戸大手グランドで11-9の僅差ながら神商大に初戦初勝利する金字塔を打ち立て部史の巻頭を飾り、更に翌年も引き続き神商業大を制しました。

それにしても新設の高専が僅か半年で上位学制でしかも経験豊富な大学チームに勝てたのはなぜでしょうか。それは(1)当時全国最強レベルとされた神戸一・二中卒の精銳が大挙15名入部した上に全25名という多数部員で固められていたこと(2)最新のラグビー技術を京大OB馬場・小西両氏からコーチされたこと(3)檜崎正雄体育学助教授の献身的な支援とハードトレーニングを受けたこと(檜崎助教は東京高師卒で陸上短距離が専門)(4)伊藤校長以下教職員と一般生徒が一丸となりラグビー部を支援したからです。

校長の支援とは実際どんなものだったのか、その1例は夕刻校長がグランドに出てラグビー部の練習を見て回ったこと、すると他の教授(仏語賀来俊一教授 英会話トラッフォード教授他)もそれを見倣らい、以後の母校には夕刻教授が各運動部の練習を見て回る習慣が定着しました。それが部位員達の励みになったか言う迄もありません。戦後昭和30年代になっても母校教授のこうした運動部視察の良き習慣は運動部好きの数人の教授(経済地理 田中博 労務管理 寺田武義 農業政策 本岡武 財務管理 宮里俊一などの各教授)に残されていました。今では考えられません。他大学にもそんな習慣は聞いたことありません。

創部半年後の10月に長田区大手町グランドで行われた初戦神商大戦には校長 教職員 生徒百人余が駆けつけ、ノーサイド後選手は教職員や学友と共に肩を組み輪になってこの快挙に酔いし入れました。創立したてで全校生僅か164人のによくも百人も応援に来たとは正に驚きです。

この試合の様子は翌神戸新聞に掲載されたので歓喜のムードは翌朝の校内に迄続きました。翌年も神商大に連勝できたのは、卒業する選手がいない上に再び神戸一・二中の優秀な選手を中心に多数の補強があり、初年度に増して実力が上がったからです。

戦前の高専ラグビー界は地方では余り普及しておらず、関西・関東を中心で、母校が創部した昭和1桁年代の関西高専ラグビー界は三高 甲南高 関学高商 同志社高商 同専門部 大阪高 浪速高 姫路高 神高船 天理外專(現天理大)といった強豪校がひしめく全国最高の激戦地でした。しかし母校はそれ等強豪校に伍して創部僅か5-12年後の昭和9-16年の7年間に、全国高専大会兵庫県決勝に12年を除き全進出、優勝3回、準優勝3回という輝かしい戦績を残しました。12年は神高船に不覚を取ったものの9月に関学大を32-3で降して初勝利しており、弱かったのではありません。その証拠に関学には14年にも34-0で快勝しています。

そしてこの高商最強期の中心選手多数が神商大に進学して同校ラグビー部でも大活躍をしました。この時期に神商大に進学した選手とは K06 田中忠雄 K07 五藤治 K08 滝谷善三郎 K09 妹尾鈴弘 K09 岡田博 K09 武田栄二 K10 平尾元宏の何れも球界の著名選手、その他にも K06 北川治也 K07 宮永嘉夫 K09 太田鋭一 K10 笠田隆 K11 三浦幹夫 K12 水谷未広 K12 若林豊治 K13 村上敏郎といった球界に名を轟かせた名選手が顔を並べていました。

### 野球部 バレー部 サッカー部 バスケ部 陸上部の目を見張る活躍

初代伊藤校長の学校を挙げてのスポーツ奨励により日本のトップレベルで活躍したのはラグビー部だけに限りません。創立翌昭和5年末迄に創部した運動部は計12部、その中の野球、バレー、サッカー、バスケ、陸上の各部はラグビー部に引けを取らぬ素晴らしい活躍をしました。ここでは紙数の都合上その戦績を詳述できませんが、主なものを挙げると以下になります。

#### 野球部

昭和5年創部 翌6年関西学生1部L(京大 関学 関大 同大他)に昇格 翌7年1部L全勝優勝 10年東京6大学優勝の慶大を迎えて撃破 因みにその他関西大学L各チームは全敗 同年角岡正彦選手が甲子園球場第1号ホームランを記録し野球界にセンセーションを巻き起こす。(注、当時ボールは飛ばなく甲子園でホームランはないとされ春夏の中高大会には長い間ラッキーゾーンがあった) 15・17年関西学生1部L連続優勝 22年全国高専大会関西予選2位、23年近畿学生L発足時1部Lに編入 31年小山修身投手が近畿大学Lで61回連続無自責点・53回無失点記録を樹立

#### バレー部

昭和4年創部 8年明治神宮大会(今の日本選手権に相当)準優勝 極東五輪大会に2選手派遣 11年西日本大会2位 東西対抗出場 関東大学の雄東大を撃破 12-13年 全日本選手権連続準優勝 24年再開の関西学生Lで1部編入2位 25年東西学生選抜関西軍に2選手派遣 26年近畿大學選手権優勝 37年関西学生1部Lに11年振りに復活

#### サッカー部

昭和5年創部 翌6年関西学生1部L昇格(京大 関学 関大 立命他)以後 14年1部L2位 朝日招待サッカー出場 同年開催予定の幻の東京オリンピック代表に5選手選抜 (2020東京五輪サッカーレディース日本代表はメダル獲得ならず残念、幻の東京五輪候補選手に小規模校の母校から選手5名選出、事前合宿に参加したと聞くと今のサッカーファンはさぞびっくり?) 戦後の学生L復活時学生1部Lに再編入 25・26年朝日招待サッカーに連続出場 26年は関東1位の早大を撃破しました。

#### バスケ部

昭和4年創部 8年関西学生1部L(京大 関学 同志社 立命 他)昇格 10・11年全国高専大会連続優勝 12年関西学生1部L準優勝 大学高専分離後の全国高専大会で13年秋L14年春Lに連続準優勝 14年秋は全国優勝

#### 陸上競技部

[高商期] 関西学生陸上大会の各種目優勝者 (100m)柴田 (200m)雜賀 (400m)西岡 3回 大橋 (800m)西岡 野村 (1500m)小川 野村 (1万m)市田 小川 (400ハードル)松岡 野村 (400リレー)(1)雜賀・田中・池内・西岡 (2)池内・西岡・小川・森脇 (3)池内・西岡・小川・大橋 (三段跳び)瀬戸 (砲丸)柴田 (円盤)柴田

[商大期] 昭26 日本学生選手権で浜崎20km日本新記録で優勝 関西学生陸上大会の各種目優勝者(400m)赤星 (800m)浜崎 (1500m)浜崎 (5000m)赤星 (円盤)中村 (槍)万谷 (10種)中村 万谷 関西学生駅伝(湊川神社→平安神宮)昭和24年4位 26年3位

戦前戦後にかけ母校の複数運動部がこのように大活躍したので母校はスポーツ強豪校として世間に知れ渡りました。それにしても学生数の僅かな高商・商大の複数の運動部が日本ないし関西トップレベルの活躍をしたのにはどんな秘密があったのでしょうか。

その一番は前述の校長以下多くの教員が運動部活動を懸命に支援した点です。各運動部の好成績は一般学生の愛校心を燃え上げらせ応援の輪はどんどん広がりました。大学が熱心に運動部支援をしなくなった昭和30年代半ばから以前の母校各運動部の大活躍はパッタリと途絶えました。

第2の理由はその時の中・高トップクラスの選手が母校のそうした大活躍で母校に憧れ次々と入学したからです。各運動部の成績不振が続くのと同時に中・高の優れた選手の母校への憧れがなくなり彼等の入学が途絶えました。

第3の理由は神戸が外来スポーツの中心だった点です。野球など1部を除き戦前殆どのスポーツは東京と関西の都市部に限定されてプレーされました。こうした外来スポーツの日本上陸地点は全て横浜(東京)か神戸(大阪)でしたが、それ等が普及したのは阪神間と神戸が殆どです。神戸の子供は幼少時からこうした外来スポーツに馴れ親しんでおり、成長すると全国中等大会県代表になり、それに準じる顕著な成績を残しましたが、その多数が母校に入学したことです。

#### K R & A C(神戸外人俱楽部)が日本スポーツ界に果たした貢献

サッカー、ラグビー、バレー、陸上競技、テニス(硬式)、ロッククライミングを含む近代登山、ゴルフ、バスケ、水泳、ボートといった近代スポーツは全て神戸-阪神間に上陸していくて広まつたのも神戸、大阪、京都からです。バレーとバスケを除けばそれ等は英国発祥で、明治初期からKR & AC(神戸外人部)の会員が神戸東遊園地でプレーしたのが最初、その人達により近くに住む日本人に伝えられました。横浜では明治初期に神戸に2年先行して YC & AC(通称横浜外人部)が誕生して数々の英国スポーツがプレーされましたが、どういう訳かラグビーを除き YC & AC の会員が日本人に広めたスポーツは見当たりません。

ラグビーは YC & AC 会員のクラーク氏と同会員田中銀之助氏が慶應大に伝えたのが最初です。しかし広まったのは京都でそれには KR & AC が深く関わっています。大正から昭和初期にかけて KR & AC と頻繁に懇親マッチをした三高 京大 甲南の多数 OB が夫々の部史で KR & AC 会員の暖かい接遇に感動してその事を生涯の思い出にラグビーの素晴らしさを讀えています。母校にも KR & AC と懇親マッチを重ねた戦前戦後の歴史があります。KR & AC との試合では終るとビールが出るのが恒例で、OB の試合にはメンバーが普段よりよく集まりました。

サッカーも KR & AC 会員が神戸市民に伝えました。全国中等サッカー大会は御影師範3連覇で始まり、その後も神戸一中の全国制覇が続きました。大学も関学と神大が日本1の常連でしたから、戦前の神戸は文句なしサッカー王国でした。母校サッカー部は関西学生1部リーグで約20年間も残留続けていますが、当時の選手は1-2名を除き全て神戸市の中学校出身者でした。

バスケは先ず東京に伝わりましたが実際に普及したのは大阪と神戸の YMCA の普及努力によります。テニスも東京 長崎 神戸にほぼ同時に伝わりましたが広がったのは神戸市内と阪神間、

神戸テニスクは日本最古のテニス倶楽部です。戦前日本のテニスコート数は私宅にも沢山あった阪神間がダントツ日本1、又甲子園テニス倶楽部はコート100面を擁して世界1を誇っていました。競泳プールも戦前は神戸 阪神間 東京に集中しており、中・高水泳全国大会は競泳も高飛び込みも甲子園プールで開かれました。ゴルフも KR & AC 会員のグルーム氏が六甲山上に開いた神戸ゴルフクが日本最古です。槍ヶ岳や穗高に登り近代登山を日本に紹介して日本アルプスの名付け親としても有名なウエストン氏も KR & AC 会員でした。その頃に KR & AC がよく懇親マッチをした相手は神商大 関学 甲南 三高 京大 同大といった全てスポーツ名門校で、これ等スポーツの各黎明期に全国覇したのはこれ等の各校にほぼ限られていました。神大は戦前戦後にかけてサッカー、テニス、バレーで何度も日本1になっています。母校の各運動部が大活躍したのには神大の大活躍に影響されています。

戦前から戦後にかけて殆どのスポーツの中高全国大会は阪神間で行われていました。最近は何々の甲子園なんて言い「甲子園」は高校全国大会を意味する言葉になっていますが、野球以外に水泳 テニス ラグビー サッカー ホッケーの各全国中・高大会は戦後も甲子園か西宮で行われています。花園は高校ラグビーの聖地になっていますが、全国大会が花園で行われるようになったのは昭和38年、花園にはまだ60年弱の歴史しかありません。現在国民体育大会の主催は毎年各県の持ち回り制になっているのは、戦前主なスポーツの選手も施設も東京と関西に偏在していたので、戦後文部省がそれを是正しようとしたのがその始まり動機です。

#### 母校、神大、関西学院3校のキャンパス用地取得の因縁話

母校元神戸商大のあった垂水高丸一帯は神戸市の開発で新興住宅地に姿を一変しています。しかし戦前は住む人もない見渡す限りの荒涼たる禿山でした。昭和3年の或る日 土地所有者 駒井鉄工オーナーの駒井弥三郎氏が垂水町長の田口政五郎氏を訪ね、この土地の有効利用を申し出ました。田口氏はこの年垂水町長に就任したばかりで、その時は正に町の発展構想を練り始めたところだったので、官立神戸高商の大学昇格情報を耳にしていた彼は渡りに船とばかりこの申し出に飛びつき、直ぐ様上京して文部省に垂水高丸のキャンパス採用を嘆願、そして文部省も田口氏の願いを了承しました。田口氏は地元明石の造り酒屋の出身で東大卒業後大蔵省に勤務、その後兵庫県議も務めた人で、霞が関にも県政にも顔の効く人でした。

ところが官立神戸高商の大学昇格担当の某教授が猛反対しました。なぜなら新商大のキャンパスは西宮上ヶ原にほぼ纏まりかけていたのです。垂水には今のJR電車(省線電車)はまだ来てなく、

大阪からの通学には便数の少ない汽車しかなく、しかも優に2時間はかかります。それじゃ新入生獲得合戦でライバル校大阪商大に遅れを取る懸念があったのです。ところが同じ上筒井(今の王子公園の西半分)にいた関学もその頃学生が増えてキャンパスが手狭となり、移転先を物色中でした。そして上ヶ原は関学が官立神戸高商の先を越して決定するという思惑外れが起こりました。

一方官立神戸高商に振られた垂水の田口町長は県立高商が新しくできると知り、そっちの誘致に切り替えて元県議の顔を活かして、長延連知事に直々談判をして、早々にその垂水誘致を決めました。垂水高丸の土地は寄付で無償ですから、昭和大恐慌下で予算難の文部省には魅力的だったに違いありません。もし官立高商がすぐ垂水に決めていたら、母校は六甲台になっていた可能性があります。六甲台への通学は阪急からずっと登り坂が続き歩くのは大変、正門を入ってからも本館や教育棟には更に長い石段を登らなければなりません。グランド等のスポーツ施設は更にその上段にあります。六甲台は垂水よりも確かに大阪には近いが、間なく省線電車の通る予定だった垂水の方が大学キャンパスとしては良かったのでないでしょうか。

### 戦争末期の非常事態下での両校の繋がり

昭和16年から戦争の激化により文系学徒の徴兵猶予期間は短縮されて繰上げ卒業になり、母校も同年の卒業式は3月にK10、12月にK11と2度行われました。同時にこの年から勤労動員の頻度が増したので、運動部の部活は大変難しくなりました。しかしそんなに厳しい環境下でも母校と予科を含む神経大の試合は例年通り行われました。しかし18年になると5月に野球 庭球 箱球 卓球は戦時学徒体育訓練実施要領により敵性スポーツに認定され部活は禁止され、ラグビーは免れたものの蹴球部と名称変更させられ、そのせいで野球ができなくなった部員がどうと転入部したので大賑わいになりました。只母校ラグビー部がこの年にできた対外試合は神経大予科だけ、19年には学徒出陣を強く求められ頑健で通る運動選手は志願せざるを得なくなり、残る学生は月-金曜日は勤労動員で3年生は6月から住友尼崎の製鉄工場に、2年生は8月から川重艦船工場と明石の航空機工場に、1年生も9月から三菱造船の潜水艦部で終日軍需作業に従事、土曜も校内で軍事訓練という非常事態で授業は完全にストップしました。

昭和20年1月20日に母校は突如海軍から経理学校にするからと校舎接収令を受け、移転先として神経大本館3階と2階の1部が指定され、週内に明け渡せということで24-27の4日間で大慌てで引っ越しました。引っ越しの期間中は勤労動員は中止され、全生徒が学習机と椅子を垂水から六甲台にエッサエッサと運びました。尤も六甲台に移転しても授業はできません。それ

にしても海軍が移転先になぜ神経大を指定したのか、軍も母校と六甲台の深い繋がりを認識していたとしか考えられません。

既に19年から米軍爆撃は激化していましたが、20年になると神戸 阪神 姫路 東播は連日連夜の空襲で一面の焼け野が原になりました。20年4月期新入生(K17)には「出身中学の勤労動員先作業に従事せよ」という通達により入学式は無期延期、7月16日に六甲台の仮住まい校舎で何とかやったものの出た人は約半分、それは新入生の多くが既に志願入隊していたからで、しかもその多くが終戦を僅か1-3ヶ月に控えて無念の戦死をしました。その33年後の昭和53年4月、G32回入学式にK17期生の入学式も合わせて挙行することになり、当日入学式に出たK17期生は式後相い寄って正門横縁地に「憧れの母校の庭に安らかに眠り給え」と刻んだ戦没同期生追悼碑を建立しました。

### 終戦直後の母校と母校ラグビー部の困窮状況

母校は終戦後の9月1日から六甲台からの引上げ作業を開始、10日垂水で始業式、11日授業再開、ラグビー部もその日戦前の最終部員だった木田郁夫氏(K14)の呼びかけで部活を再開しました。とは言っても出たのは小倉康秀(K16) 山崎賀之氏(K17)他3-4名だけ、バスとジョギングしかできませんでした。この3人は卒業後神経大に進学しラグビーを続けました。18日から勤労動員で授業を全く受けず卒業したK14とK15生、それに神経大予科卒業生を入れた人達を対象に母校は6ヶ月の予定で補修講義を開きました。受講希望者37名、彼等は待ち侘びた講義再開で時には夜も教授宅に押しかけて受講するという熱心さで、この全員が翌4月に神経大に進学しました。それにしても学校経営のこんな大変な時期に、少なくとも形式上卒業済みの学生や他校生迄を対象に補修授業をした学校は全国で他にありません。

10月30日にK15回生卒業式を挙行、10月からは在学中志願入隊した復学生と、占領軍命令で廃校された陸士、海兵、高等商船(戦争末期に東京神戸の両高商船は清水高商船に1本化されていた)の終戦時学生の受け入れを文部省令により始めたところ、応募者が際限なくぞろぞろと続き、結果的にK17期生は514名に膨張して講義を続けられなくなり、やむなく冬季休暇を12月8日→2月3日に前倒しと引延ばしして臨時休講、翌21年3月にはこのK17期生全員対象に臨時選考試験を実施して、その成績によりK16に編入32名、K17に編入114名、残りはK18編入と3学年に振り分けました。只その一方には自らの試験結果で就学を断念し退学した人達も多くありました。ところが4月になってからも京城高 台北高 旅順高工 東亜同文書院等の海外

高専の引揚学生の編入希望者が引きも切らず母校の混乱は夏が近づいても收拾できませんでした。

ラグビー部も本格的な練習開始は結局4月からになりました。とは言ってもグラウンドは軍の接収で見るも無残に荒れ果てていたので整地と石ころ拾いから始めなければなりませんでした。戦争末期の部活停止と動員により新入部員に中学でのラグビー経験者はなく、木田新キャプテンは途方に暮れてOBに助けを求めました。それに手を差し伸べたのは戦前高商の最強期を築いた人達、その中には神経大に進学した人が沢山いました。只練習着もスパイクシューズもありません。当時の若者の普段着は軍服に軍靴です。コーチしていた五藤先輩が「サイドステップとはこうやるんじゃ」と叫んだ瞬間ズルッとスリップ転倒して顔面を石だらけのグラウンドに思い切り打ち付け「起き上がった先輩の顔は血だらけ、歯の間に砂が光っていた」と部誌に記述されています。

経験不足を埋めるため昭和21年の夏合宿は校内でOB数人の指導下に壮烈を極めました。この人達は一旦はお国に命を捧げる覚悟をした猛者達なので手加減はありません。人生初の夏合宿の猛練習で意識朦朧としたK氏が「親に先立つ不孝 お許しください」と遺書を書いた話は部の伝説になっています。

その頃校内の旧銃器庫や馬小屋に焼け出された教授や学生何人かが暮らしていました。合宿中の部員が夜食の手製カレーを1皿教授に届けたところ「これはこれは! 凄いご馳走を!」と言ったものの言葉が詰り、ポロポロと涙を流して喜んで貰ったと50年史に記されています。しかしこうしたOBのモーレツ指導が実を結び素人集団だった山崎賀之キャプテン率いる翌22年度チームは全国官公立高専兵庫大会で5戦5勝して見事に古豪復活を遂げました。その後も優れた高卒選手の入学が相次ぐ幸運にも恵まれ、26年の全国(新制)大学大会は日光武キャプテン率いる精鋭が近畿決勝戦で関大を降して翌正月名古屋瑞穂球技場の全国大会に出る快挙を成し遂げました。(日光氏自身も昭和21年の神戸二中全国優勝チームのSO)

ところで戦後再出発した当時の日本ラグビー界はどんな様子だったでしょうか。戦争末期2-3年はどの中学も部活停止だったせいで戦前の名門校も新入生は未経験者ばかりでした。特に東京は焼け野ヶ原で住む家も食べ物もないひどい状態でした。戦前の関東強豪チームには地方出身者が多くそれが関東学生ラグビーの強味になっていたので、戦後関東勢が力を落としたのは無理ありません。昭和21年秋は京大が全国制覇、続く2-3年も関学が関東名門校を制する関西優位が続きました。

その頃関西ラグビー界でちょっとした異変がありました。それはクラブチームの台頭です。中でも戦争帰りの元ラガーマンが集まって作ったKYRC(関西ヤングメンラグビーク)は名門大学や社会

人強豪チームに匹敵する実力を持ち、その外にも大阪ク 惣々ク 近畿ク 伊丹クといった同好クが活躍、それに関西稻門ク(早大)、大阪駿台ク(明大)といった関東名門校OBクもこの流れに加わりました。戦後数年の秋の日曜日午後3面あった西宮球技場本部棟周辺はお互い顔見知りの元ラガーメンで賑わい、中にはジャージを入れたボストン片手に「何処か入れてくれるチームないかいナ?」と欠員チームを探す人達もいたり、戦争の終わった嬉しい雰囲気一杯でした。淡水ラグビーが毎週のように活発に試合をしたのもこの流れです。その中心メンバーは戦前最強期の人達、それは戦後母校再開チームを熱烈指導した人達、大部分が凌霜ラ会員を兼ねる人達でした。恐らく「コーチだけじゃつまらん。俺達も試合をやろうや」ということだったのでしょう。

現在の淡水ラの会費制度ができたのはこの時です。高商1回の大先輩が「毎週の現役コーチ、ご苦労さん。試合の経費や後のビール代はOB会で持ってやろう」と言ってくれたのが発端、集金役は現役マネージャー(今の主務)でした。それとは別に26年の全国大会出場に大先輩が歓喜、盛大な壮行会を開き、更に本大会出場遠征費とユニフォーム新調のため「奉加帳」が各OBに回されました。部員中には合宿費負担のできない人もおり、翌年から奉加帳の目的は夏合宿援助に変わった上、後年この2つはOB会費に統合されました。只、凌霜ラの現役援助は今でも年300万円を超す金額が集まっているのに、淡水ラグビーはその何分の1にならない金額に減っているのは淋しい限りです。

### 過酷だった昭29両校合同夏合宿

昭和29年度夏合宿は高商最強期メンバーで神商大に進学した妹尾鈴弘・岡田博両氏の強い意向により両校合同で8月下旬の10日間神大教育学部グラウンド(元御影師範)で行いました。合同と決めたのは現役同士が相談したからではありません。両部合同夏合宿はこれ1回切りで以後もありません。当時はまだ夏合宿を涼しい信州や北海道でやるという発想はなく、暑さに耐えられる精神力をつけることが夏合宿最大の目的でした。合宿を御影でやれば学生寮を使えるので宿泊費と現地迄の交通費不要 練習マッチができるので実効が上がる OB多数参加が可能が狙いでました。

合同合宿指導体制は 総指揮は神大ラグビー部長丹羽正教授 FW指導妹尾鈴弘氏と岡田博氏、BKs指導は太田圭吾氏(神大OB)でした。イザそれで始まる週日にも両校OB数名が来場、週末には40人を超すOBが大挙来場、文字通りマンツーマン指導でした。連日晴天で真夏の炎天下午前午後合わせ8-9時間を超す猛練習、飲水や歩行移動は禁止、日陰げの練習も回避、夕方グラウンドが陰るとわざわざ日向に移動する徹底さでした。今じゃ考えられない厚手の長袖練習着

＋ストッキング必着、蓄積疲労で経験の浅い下級生だけでなく正副キャプテンにも意識混濁や昏倒が続出しました。それは多分熱中症が原因で大変危険ですが、当時それを危険という認識は全くありません。昏倒してもそのまま日向に放置されたままというのもよくありました。世話をすむマネージャーは両校で2人だけ、女子マネなどいません。2人は買い物や怪我人治療で近くの甲南病院に就き添ったりしていて不在が多く、正に凄惨な夏合宿でした。

只これ以降神大はめきめきと力をつけたのに母校にはいい選手の入部が途絶え、次第に神大に勝てなくなりました。昭和37年の関西大学リーグ発足時は母校もBリーグスタートしましたが、1勝9敗で翌年下位リーグに降格、神大が下位リーグ転落した昭46年に1度対戦しましたが惜敗、その年神大は全勝して1年で上位Lに復帰、以後母校は下位L滞留が続いて公式戦対決はなくなりました。昭和54年に創部50周年記念に神大を招待して記念試合をしました。

#### 母校ラグビー部創部以来の神大との対戦実績

昭和 4 10 27	○ 10 - 9	昭和 5 10 11	○ 13 - 12	昭和 6	△ ? - ?
昭和 7 10 30	● 8 - 12	昭和 8 11 2	○ 24 - 6	昭和 9 10 28	● 3 - 52
昭和 10 10 2	● 11 - 37	昭和 11 10 25	○ 38 - 0	昭和 12 10 31	● 3 - 25
昭和 13 5 28	● 10 - 13	昭和 13 10 30	● 5 - 20	昭和 14 9 24	○ 37 - 0
昭和 15 11 10	○ 6 - 3	昭和 16 4月	?	昭和 17 5月	○ 17 - 8 予科
昭和 22 11 10	○? 予科 県大会	昭和 23 11 10	○ 34-5 予科	昭和 25 11 18	○ 52 - ○ 予科
昭和 25 11 19	● 6 - 19	昭和 26 5 16	● 3 - 12	昭和 27 12 10	○ 15 - 6
昭和 28 5	● 6 - 8	昭和 28 11 15	○ 35 - 0	昭和 29 5 14	○ 9 - 3
昭和 29 12 12	● 8 - 13	昭和 30 6 8	△ 3 - 3	昭和 31 6 6	● 5 - 12
昭和 31 11 18	● 11 - 18	昭和 32 11 17	● ?	昭和 34 11 22	○ 13 - 6
昭和 35 11 6	● 14 - 28	昭和 46 C 公式戦	● ?	昭和 53 8 21 菅平	● 4 - 8
昭和 54 5 3	● 6 - 42	母校ラグビー部創部 50 年記念招待試合 於 垂水母校グランド			

【お断り】上記以外に記録脱落の可能性と、無記録前提の練習試合があると思います。

#### 引用資料

神戸大学ラグビー部創部七十五年記念誌

神戸高商神戸商大ラグビー部五十年史

京都大学ラグビー部六十年史

ベースボールマガジン社「日本ラグビー百年の記録」

神戸商科大学五十年史

高丸丘惜別譜

淡水ラグビー会誌 36 号「創部八十年記念誌」

日本ラグビーフットボール協会「日本ラグビー史」

兵庫県立大学ラグビー部 85 周年記念誌 高木応光 星野繁一 日本ラグビー学会「ラグビーフォーラム」

ラグビーフットボールの生い立ちと日本ラグビーの形成 ラグビーとはどんなスポーツか 野田五郎

雑誌淡水 No64 号 淡水隨想「神戸高商設立の秘話 運動部の活躍」 野田五郎